

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

「人類社会の進化史的基盤研究（3）-他者-」第5回研究会

日時：2013年2月11日（月曜日）午後1時～7時

場所：小会議室（302室）

報告者：

1. 竹ノ下祐二（AA研共同研究員・中部学院大学）
2. 熊野純彦（AA研共同研究員・東京大学）

内容

1. 環境を共有する者としての他者（竹ノ下祐二）

生態学とは生物と環境の相互作用を考える学問である。生態学における環境とは、生物（個体）をとりまき、それと相互作用する生物的または非生物的事象の総体である。本研究会のあつかう「他者」が「自己」と対峙し関わりをもつ？相互作用する？存在だとするなら、他者は広義には生態学でいう「環境」に含まれることになる。

しかし、環境のすべてが他者とはいえない。他者は環境の一部である。つまり広義の環境は《他者》と他者以外の環境（以後《環境》）に区分される。果たして生態学においてそのような区分に意味があるだろうか？ニッチ理論を手がかりに考えてみたい。

ニッチに関して現在ポピュラーな考え方はハッチンソンが整理した。ニッチとは、気温や湿度、日射量、降水量、栄養塩類の濃度など、生物の存続を制限する要因を組み合わせた n 次元空間である。

ハッチンソンはさらに、基本ニッチと実現ニッチに区別した。捕食者や競争する他種が存在しない場合、生物は十分に大きなニッチ空間を占めることができる。これが、基本ニッチである。一方、自然界では生物が基本ニッチをそのまま占有できることはまれで、実際には捕食者がいたり、重複するニッチをもつ競争者がいる。その場合、生物が実際に存続できるニッチ空間はそうでない場合より小さくなったり変化したりする。これが実現ニッチである。

ここで疑問が生じる。ある生物の基本ニッチの実現を阻むのは、いったい何者だろうか？

ハッチンソンのいう n 次元空間はほとんど「環境」と同義である。ならば、捕食者や競争者も、原理的にはニッチ次元の一つ、すなわち環境の要素としてモデルに組み入れられるべきである。だが、競争者や捕食者はニッチの構成次元から区別され、当該の種とニッチ空間を共有し、《環境》との相互作用に干渉する存在、すなわち生態学的《他者》である。

ニッチ理論の中に《他者》を見いだすことはできたが、生物群集を構成するある種にとってどの種が《他者》で、どの種が《環境》なのか。それを決めるロジックを、現在の生

態学は持っていない。たとえば、中部アフリカにはゴリラとチンパンジーという 2 種のヒト科類人猿が同所的に生息しているが、ゴリラにとってチンパンジーを競争者すなわち《他者》なのか、それとも制限要因すなわち《環境》なのか。われわれは前者だと思いたいけれども、それには根拠がない。食物や遊動様式に共通性があることを根拠にするならば、やはり同所的に生息するゾウは White がいうように「名誉類人猿」として《他者》の地位を与えられるべきである。ではマンドリルは、グエノン、果実食のコウモリは、どうなるのだろうか。《環境》と《他者》の区分は論理的には決定不能である。

しかし少なくとも、当のゴリラは、群集を構成する生物たちを、《環境》と《他者》とに区分している。それが如実にあらわれるのが"人づけ"のプロセスにおいてである。類人猿の人づけプロセスにおいて、われわれ観察者は当初ゴリラにとって生存を制限する要因の一つであったが、人づけの進行につれ、ヒト、ゴリラが相互に個体識別をし、さまざまな社会交渉が可能になった。同じことがゴリラとチンパンジー、あるいはゾウその他の動物との間でおきてても不思議はないはずだ。

2. 他性をめぐる哲学小史（熊野純彦）

他性（alterite）をめぐる哲学的思考の歴史は、プラトン以来の伝統を有している。それは基本的に「同 le Meme」と「他 l' Autre」とのかかわりをめぐって展開されてきたといえてよい。

「同」はみずからとひとしいかぎり「同」であり、「他」とはことなるかぎりでは、それじたい「他」でもある。「他」はそれが「他」であるかぎり、まさに「他」そのものであると同時に、じぶんとひとしいものである以上は、みずからはまた「同」でもある。基礎カテゴリーをめぐるとこのようなことへの消息は、アリストテレス以来の「ヘテロス・アウトス」つまり alter ego（他我）にかかわる思考にも、その影を落とすことになるだろう。Alter ego とは、あらかじめ、ego であるとともに、ego とはことなる（alter）ものであると規定されているからだ。

ほんらいの意味での「他者」つまり人間的他者が主題化されたのは、とはいえ、デカルトによる「考える私」の発見以降のことである。「私」「自己」の哲学的焦点化を俟ってはじめて「他者」をめぐると問題系もまた主題化されることが可能となったからである。Cogito とは「私」は考える」であって、cogitamus（「私たちは考える」）ではない。それでも、コギトはいったいどのような理路をたどって、コギタムスへといたることができるのか。この問いが、デカルトの設定したみちすじのうえに展開された、近代哲学における他者論の問題設定にあって、その基軸をかたちづくるものとなる。かくしてそこでは、alter ego が同時に ego である事情こそが解明されるべきものとなったのだ。

このような問題の地平そのものを、「同」の優位として批判するところに、現代の哲学的他者論は開始される。ごく図式的にいうならそこでは、alter ego がむしろまさに alter であ

るゆえんこそが主題化されるにいたることだろう。「絶対的他者」という（中世キリスト教神学における神の規定をも想わせる）対抗的レトリックが指示しようとするものは、「他」者であるかぎり、自己から無限な隔たりをもって距てられている他者に帰属すべき、その他性（Andersheit）そのものにほかならない。

他者は私にとって、もはや手の届かない過去のように遠く、いつまでも手の届かない未来のように遙かである。たとえばそう語られるとき、そこにふくまれる、しばしばロゴスを逸脱したロゴス、ロゴスを超えたロゴスが示しているものは、「同」へと回収されることを拒みつづける他者、「他」でありつづける他者という、語りえないものをあえて語りだそうとするところみななのである。